特集 BLUE SKY（ブルースカイ）

白球を追いかけた先に見た空 ——

障がい者ソフトボールチーム「内子ブルースカイ」。昨年、山口県で開かれた大会で2連覇を達成しました。

メンバーの中には、事故による大けがで体の一部を失った人たちがいます。チームに入る以前は、当たり前だったことができなくなる苦しさで、心の中にどんよりとした雲が覆っていたそうです。

しかし今、手足や聴覚に障がいがあっても晴れ晴れとした表情で懸命にプレーする姿は、障がいのつらさを感じさせません。

今回の特集は、3連覇に挑んだブルースカイに密着。大会に込められた思い、選手たちの思いを知ると、チームが担う大切な役割が見えてきました。

雨にも負けず、ブルースカイ大健闘

ある人は片腕だけで、またある人はほとんど音の聞こえない中、懸命なプレーを続けた「内子ブルースカイ」——。3連覇の夢は途絶えても、選手の表情は晴れやかでした。

1

2

3

4

5

6

「ナイスバッティング」、「ドンマイ、ドンマイ」——。前日から漂う雨雲をかき消すような、元気ではつらつとした声がグラウンドに響き渡ります。

7月14日、山口県山口市で「第29回西日本障害者ソフトボール大会」が開かれ、中四国地方と九州地方から14チームが参加。27・28回大会で優勝した「内子ブルースカイ」(以下、ブルースカイ)は、3連覇に挑みました。

障がいに対する理解や障がい者の社会参加を図ることを目的に、毎年開催されている同大会。障がい者だけでなく、シニアやレディースチーム、その他の健常者も支援者として参加することができます。

ブルースカイは、手足や耳に障がいのある人と健常者で構成されたチームです。初戦からチームワークを発揮し、決勝トーナメントに進出。準決勝で2対3と力尽き、結果は4位と惜しくも3連覇は逃しました。

試合後、選手の一人は「力を合わせて戦えて、交流の輪も広がった。優勝することよりも意味がある」と胸を張りました。力を出し切った選手の皆さんは、敗れても爽やかな表情をしていました。

10

7

9

8

12

11

7_ 試合後の固い握手。また、来年もこの場所で——　8_ ヒットを打ち、ベンチからの声援に手を上げて応える　9_ あいにくの雨模様でも、表情は晴れやか　10_ 躍動感のあるウインドミル投法で、力強いボールを投げ込む　11_ 狙いすまし、左手一本で振りぬく　12_ 力を尽くし、最後は爽やかに記念撮影

1_ 円陣を組んで士気を高める　2_ 捕球後、右手にはめていたグローブを素早く外して送球　3_ 大会に花を添えるレディースチーム　4_ 前年度優勝のブルースカイが、開会式で優勝杯を返還　5_ 生還してベンチの出迎えを受ける　6_ 地元中学校の野球部員が、ボールボーイなどのボランティアで参加

「障がい者だけでは意味がない」大会に込められた思いとは

大会の創設から携わってきた、山口県障害者ソフトボール協会前事務局長の小柳郁夫さん。「障がい者の頑張っている姿を知ってもらいたい」と願っています。障がいの違いを超えてソフトボールの楽しさを共有できる大会は、相手への理解と障がい者の自信につながっています。

山口県障害者ソフトボール協会前事務局長
小柳　郁夫（いくお）さん

障がい者の頑張っている姿を知ってもらうことが一番

第1回大会から昨年の28回大会まで、事務局長を務めました。大会を企画した際、一番に考えたのは障がい者の皆さんが頑張っている姿を、多くの人に見てもらうことでした。

それまでの経験から、「障がい者のスポーツ大会を応援しに来てくれるのは、家族や知人だけ。障がい者が身近にいない人たちには、知ってもらえない」と思いました。そこでシニアやレディースチーム、健常者も一緒に参加できる大会を企画することで、より社会とのつながりを感じられる大会を目指しました。

まずシニアチームに声を掛けましたが、なかなか参加してくれるチームは見つかりませんでした。「けがをさせてしまっては困る」「障がい者の大会だから、障がい者だけでやるべきではないか」と言われたこともありました。そこで私は「障がい者の頑張りやレベルの高さは、口で言っても伝わらない」と考え、とりあえず一度だけでも見に来てほしいとお願いしました。

見てもらったことで、きっと何かが伝わったのだと思います。第2回大会からはシニアチームが参加し、それ以降はレディースチームなどにも参加が広がっていきました。

一度参加してくれたチームは、次回からも快く参加してくれます。30年近く続けてきた今、ボランティアを含め200人以上が参加してくれる大会に成長。多くの人に見てもらうことが、障がい者の活力になっています。

共に参加できる仕組みと大会の持つ役割

昔は腕や足、聴覚など体のどの部分に障がいがあるかで、別々に競技をするスポーツばかりでした。障がい者同士でも、交流は十分とは言えなかったと思います。

私たちの障がい者ソフトボール大会は、例えば走ることが困難なバッターに代わって「打者代走」が走塁をしたり、盗塁やパスボールでの進塁を禁止したりすることで、足に障がいのある人が不利にならないルールを設けています。さまざまな障がいの人たちが一緒に参加できる仕組みは、障がい者への理解につながり、本人にとっても「障がいがあってもできることはある」という自信につながります。健常者からは、「障がい者大会ということを忘れて、試合を楽しんでいた」という声も聞こえてきます。

▲後ろに控えるのは「打者代走」。走ることが困難な打者に変わって走塁を担う

自信につながる大会をこれからも――

私も障がい者の一人です。昔はいじめられたりからかわれたり、嫌な思いを経験してきました。障がい者の多くが、自分の障がいを隠していた時代がありました。しかし、今では障がいを見られても嫌とは思わず、隠さない人が増えています。私たちの大会のように、障がい者が社会参加できる大会が増えたことが、社会との垣根を無くすことにつながっています。

「ヒットを打ちたい」「試合に勝ちたい」。ソフトボールを通して、障がい者の皆さんは努力しています。また、多様な人たちと一緒にプレーすることで、「自分の障がいは、恥ずかしくはない」との思いが心に芽生えてきます。障がい者の皆さんが自信を持てる一つのきっかけとなるように、これからも大会を続けていきたいです。

▲開会式の様子。シニアやレディース、健常者など多様な顔ぶれが並ぶ

内子ブルースカイ　支援者
藤岡　洋一（よういち）さん

ひたむきなプレーに感動

学生時代から野球やソフトボールをやってきました。ブルースカイを手伝い始めたのは、13年前。職場の人に誘われたのがきっかけです。

参加してすぐ、障がい者のプレーに驚かされました。ある試合で、腕に障がいのある外野手のところへ、大きな打球が飛んでいきました。私は「無理だ、追いつけない」と思いましたが、その選手は諦めていませんでした。頭から飛び込んでアウトにしたのです。精いっぱいのプレーを目の当たりにして、ひたむきに白球を追いかけていたころの気持ちを思い出しました。それから「自分にできることは何でもしよう」と、審判の役も率先して引き受けています。

同じユニフォームを着て同じグラウンドに立てば、障がい者も健常者も関係ありません。実際、健常者だけで構成しているシニアやレディースチームとも、毎年いい勝負を繰り広げています。私もメンバーである以上、中途半端なことはしたくありません。必要としてくれるチームのために、これからもできることで協力し続けたいと思っています。

▲笑顔で戦況を見守る藤岡さん（右奥）

▶今大会からボランティアとして参加した、㈳山口県柔道整復師会

ブルースカイがあったから、出会い、気付き、救われた

「まさか、自分が障がい者に……」。取材で出会った多くの人が、同じように話し始めます。突然の事故、昨日まで当たり前だったことができないもどかしさ――。つらい日々を乗り越え、笑顔で過ごせるようになるまでの過程には、家族の支えや仲間たちとの出会いがありました。ブルースカイのメンバーから、大森広一さんと緒方憲次さんを紹介します。

絶望の淵から救ってくれたのは、家族とブルースカイだった

大森　広一（ひろかず）さん＝岡第2＝

忘れもしない、平成14年10月16日――。地域の祭りで神輿を担いだ翌日のことでした。誤って職場の機械に巻き込まれ、私は左腕の先を失いました。

退院後、現場の仕事はできないからと、営業をすることになりました。最初は人前に出るのが億劫で、特に知人に会ったときは、気を使わせてしまうようで嫌でした。「これからどうなるんだろう――」。憔悴しきっていたとき「生きていても仕方がない。死にたい」という考えが頭をよぎりました。

絶望的な状況から立ち直れたのは、家族の存在があったからです。けがをした当時、妻のおなかには娘がいました。「新しい命がある」。そのことが大きな力となり、「このままでは駄目だ」と前を向くことができました。家族や周囲の支えもあり、徐々にですが人前に出ることにも慣れてきました。

そして、ブルースカイに出会いました。大会に参加すると「あの人は、あれほどのけがをしても頑張っているのに、俺も頑張らないと」と思える経験ばかりでした。言葉ではなく、見ただけでそう思ったのです。参加し始めて数年後、ブルースカイの仲間から「最初は死んだような目をしていたのに、いい表情に変わってきたな」と言われました。自分では気付いていませんでしたが、いつの間にか自分自身も明るくなっていたようです。支え合えるチームの仲間たち、サポートしてくれる支援者の皆さんには、感謝の気持ちでいっぱいです。

大会には、妻や子どもたちと一緒に参加してきました。けがをした時に妻のおなかにいた娘が、ブルースカイでピッチャーをしてくれたこともあります。子どもたちにとっても、障がい者が頑張る姿を間近で見てこられたのは、貴重な経験だったのではないでしょうか。

大森さんご家族。過去の大会には家族ぐるみで参加してきた

【右】職場の缶詰工場。出荷前の商品が並ぶ
【左】営業担当の大森さん。手際よくデスクワークをこなす

「できない理由」から「できる工夫」へ ブルースカイで学んだこと

緒方　憲次（けんじ）さん＝内子19第2＝

私は30歳の時に、右腕を失いました。突然のことで気持ちの整理がつかず、ブルースカイに誘われても最初は行く気になれませんでした。初めて大会に参加したのは、けがをしてから5年後のことでした。

大会に参加したとき、私と同じく片腕のない人が、タオルの片方の端を物にひっかけて、器用に絞っているのを見かけました。タオル一つ絞るのも誰かに頼んでいた私にとっては、工夫一つで自分でもやれることを学ぶ機会になりました。またある試合では、脳性まひの選手が椅子に座った状態でキャッチャーをしていました。自分のできることで、懸命にプレーする姿が印象的でした。

障がいの程度は人それぞれですが、境遇は似ていると思います。私が心打たれたように、私が何気なくやっていることでも、誰かのためになっていることがあると気付かされました。

私は片腕しかないので、守備のときはボールを取るとすぐさまグローブを地面に落とし、再びボールを左手でつかんで投げます。もともと右利きなので、最初は真下にボールをたたきつけてしまうことも――。思うようにならないもどかしさを口にしたとき、「できないのは障がいの問題じゃなくて、やる気の問題。練習すればできるようになる」とずばり言われてしまいました。厳しい言葉ですが、変に気を遣わず、互いに言いたいことを言える環境が、私にとって大切だったのかもしれません。

大会に参加している人たちは、障がいを隠しません。どこか暗く、心を閉ざしている人でもだんだんと表情が明るくなるのが分かります。みんな同じように感じて、学んだのだと思います。私もたくさんの顔見知りができました。「元気やったかい」と声を掛け合えるのも、楽しみの一つになっています。

毎月１回開く、同い年の集まり。けがをして間もない頃は、お酒を飲む気にならなかったという緒方さん（中央）ですが、「今はこの集まりが楽しくて欠かせない」と笑顔

手を伸ばせば届く、つながる、思いがある

かつては愛媛県内にもいくつかの障がい者ソフトボールチームがありましたが、残っているのはブルースカイだけ。「大切な場をなくしてはいけない」と力を込める、代表の山本勝美さんに思いを聞きました。

内子ブルースカイ代表
内子町身体障害者更生会
体育部長
山本　勝美（かつみ）さん
＝内子19第1＝

「ずっと続けていこう」障がい者同士の約束

山口市の障がい者ソフトボール大会は、障がい者が頑張ろうと思ったり、同じ境遇の人から学んだりできる、大切な大会になっています。

私たちも山口市の大会に習い、「内子町並み杯」を始めました。ルールも同じで、シニアやレディースチーム、健常者が一緒になって大会を盛り上げています。参加チームの減少で開催が危ぶまれたこともありましたが、「続けてほしい」という、たくさんの声が後押しとなって14年間続いています。

愛媛県外のチームも内子町に来るのを楽しみにしていて「山口市と内子町の大会は、ずっと続けていこう」というのが、いつしか障がい者同士の約束になっています。

チーム存続への思い

以前は愛媛県内にもいくつか障がい者チームがありました。現在、存続しているのはブルースカイだけで、町外選手の受け皿にもなっています。それでも人数は少なく、ブルースカイ自体も年々存続することが難しくなっているのが現状です。

個人情報を保護する理由で、私たちに詳しい情報は入りませんが、内子町では約1100人に障がい者手帳を交付しているそうです。かつての大森さんや緒方さんのように、悩んでいる人がたくさんいるのではないかと、心配しています。

私はブルースカイを絶対になくしてはいけないと思っています。このチームに出会って、人生が開けた人がたくさんいるからです。まだ障がいで苦しんでいる人がいるなら、その人たちを応援したいし、健常者にも感動や勇気を与えられるチームであり続けたいです。

互いに手を伸ばしたら きっと、思いもつなげられる

ブルースカイは基本的に障がい者のチームです。大会の運営は障がい者自身で行います。少ない人数で運営の役割を分担したり、充実した練習ができなかったりするので、健常者の協力が不可欠です。「こんなことができるよ」と、手を差し伸べてくれるとうれしいです。

チームメイトも随時募集しています。ソフトボールの上手下手は関係ありません。やるからには一生懸命してほしいですが、勝ち負けよりも「頑張ろう」と思う気持ちや多くの人と交流を重ねることが大切です。障がいについて一人で悩まず、話してみてください。私たちと一緒に気持ちのいい汗を流せば、心に広がる曇り空は、きっと青空に変えられると信じています。

心に広がる曇り空は、
きっと青空に変えられる――

みんなの心に青空を――

山口市の大会は障がい者に配慮したルールを設けることで、誰もが試合を楽しんでいました。参加した健常者からは「レベルの高さに驚いた」という声が聞かれました。試合を通して理解が深まったことで、「障がいがあるから」という見えない壁が、取り払われたのではないでしょうか。

ソフトボールに限らず、他のスポーツや日常生活の中でも同じです。少し環境を変えることで、力をより発揮でき、みんなと同じように参加できる人がいるかもしれません。世の中にはまだまだ障がい者にとって障壁になることがたくさんあります。その壁を取り払ったとき、すべての人の心の中に、澄み渡る青空が開けてくるのかもしれません。

チームメイト募集中
未経験者も大歓迎です。
内子ブルースカイ　山本
☎0893（44）2165